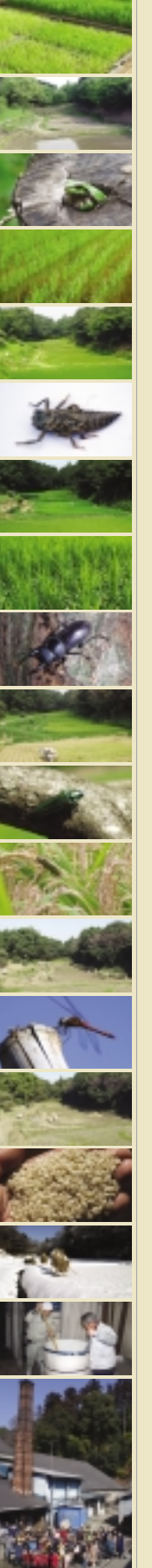


イベント内容	活動月日(参加人数)	炊き出しメニュー	アサザ基金の活動
第1回「田植え」 サツマイモ・大豆・落花生の苗植え 田楽奉納「津軽三味線」(大高さん親子)	5月21日(230名) 谷津田周辺の自然観察	・菊ご飯 ・煮物(フキ) ・ちゃんこ風鶏団子汁 ・天ぷら(レンコンなど) ・目玉焼き	
第2回「草取り&ホテル観賞」 「オカリナアートJOY」ミニコンサート 自然観察、畑の草取り ギャラニ取り My田んぼファッションショー 桑山子作り 「谷津田の自然」学習会 夜の谷津田散策・ホテル観賞	7月30日(180名)	・おにぎり ・汁物 ・煮物 ・枝豆 ・から揚げ ・目玉焼き ・スイカ、トマトなど	4月 苗作り(稲・枝豆) 5月 苗植えつけ、一日きり、生物観察
「草取り」ミニイベント 田んぼ・畑の草取り、大豆の種まき、ザリガニ取りなど	6月25日、8月6日(臨時)、8月21日(計45名)	・汁物	6月 種まき(味噌用)、草取り、生物観察
第3回「稲刈り&収穫祭」 サツマイモ・落花生の収穫 餅つき	10月22日(210名)	・おにぎり ・汁物 ・煮物 ・天ぷら ・目玉焼き	7月 アサザ植え付け会、生物観察、枝豆収穫 8月 恋瀬川下り トンボスケッチ会 9月 アサザお花見会 10月 大豆収穫(味噌用) 生物観察
「脱穀」ミニイベント 焼き芋	11月3日(90名)	・ご飯 ・汁物 ・煮物 ・焼き芋 ・きなこ、あんこ餅	11月 一日きり、生物観察
「酒仕込み」ミニイベント 「神事・お祓いの儀」見学 味噌作り 竹細工	1月14日(115名) 酒蔵見学、試飲会 七草がゆ作り	・NEC田んぼ新米 ・七草がゆ ・小豆がゆ ・汁物 ・煮物 ・たくあん	1月 一日きり、生物観察 2月 生物観察 3月 一日きり、生物観察
第4回「新酒蔵出し」 ラベル貼り・小冊子掛け 谷津田の生物観察 キノコの原木作り	3月4日(130名) 酒蔵見学、試飲会 竹細工 落ち葉かき、里山整備 わら細工 焼き芋	・NEC田んぼ新米 ・粕汁 ・煮物 ・たくあん ・目玉焼き ・しんこ餅 ・焼き芋	
参加者合計約1,000名 (スタッフを含む)			

谷津田の一年



NEC田んぼ作りプロジェクト with アサザ基金 2005年度活動報告書

プロジェクトの概要

NECは、社員および家族を含めた環境意識啓発の実践の場として、2004年度よりNPO法人アサザ基金が推進している「霞ヶ浦流域の水源地保全・谷津田再生事業」との協業を行っています。2004年度は累計約600名のNECグループ社員及びその家族の方々が参加し、田植えから草取り、稲刈り、そして収穫米を使った日本酒造りまでを体験しました。そして自然の営みのたくましさや奥の深さを実感し、豊かな恵みを分かち合うことができました。

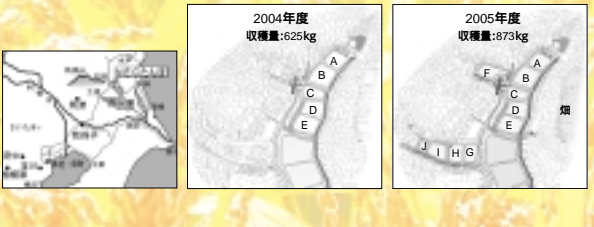
活動2年目となる2005年度は、隣接する田んぼをさらに再生させ、倍の面積でスタートしました。また不耕栽培や畑作り、さらには味噌作りにも挑戦しました。お陰様をもちまして、累計約1,000名の方々が参加して下さり、より充実した年間プログラムを通して、環境への意識を一層高めてもらうことができました。そして、参加者の思いのこもったお酒「愛訂で笑呼」が白菊酒造(株)殿の手によって立派に出来上がりしました。

本プロジェクトに参加された皆さんが年間活動を通じて感じられた自然のすばらしさや収穫の喜びをより多くの方にお伝えするため、活動の概要をこの報告書にまとめました。今後もNECグループ環境意識啓発活動に多くの方がご参加いただくことを願って、ここにご案内いたします。ぜひ、ご一読いただき、環境経営推進の一助となれば幸いです。

2006年4月 NEC CSR推進本部 環境推進部 NEC田んぼ作りプロジェクト

2005年度の活動概要

今年の北ノ入田んぼは、昨年の5田んぼ(ABCDE)に、新たに一杯池(F)と貝柄(GHI)を開墾してできた5田んぼが加わり、約2倍の面積(4,400m²)になりました。自然が残る谷津田での田植え・草取り・稲刈り・脱穀等の米作り体験に加え、不耕栽培の試み、一日きりでの森林管理活動、隣接する畑でのサツマイモや大豆などの苗植え・収穫および旬の味覚体験、さらには味噌作り体験と大幅に活動範囲が広がりました。また、田・畑の農業技術指導や新鮮な野菜・果物の購入など、地元農家との交流も深まりました。



プロジェクトの主旨・目的

NECグループは長期ビジョン「NEC環境経営ビジョン2010」の中で、環境と調和した持続可能な事業体への変革を目指して、環境意識向上目標として「2010年までに全社員がエコ・エクセレンス()になる」ことを掲げています。その一環として、NEC社員および家族を含めた環境意識啓発実践の場を提供するために、2004年度よりNPO法人アサザ基金が霞ヶ浦流域で展開されている谷津田再生事業との協業「NEC田んぼ作りプロジェクト」を開始しました。これは、稲作からお酒作りまでの一年を通じた自然体験プログラムを提供すると共に、NECの製品や技術を活用した「ネットワークセンサー」をキー・コンポーネントとする環境モニタリングシステムの開発も意図したプロジェクトです。

本プロジェクトの中では、家族の方々を含めた参加者全員に、自然にふれ生き物の逞しさを実感し、また地元の文化や風習にも親しみながら地域の方々との交流も深めていただくことができます。

最終成果である「お酒」には「愛訂で笑呼(あいていでこ)」という銘をつけています。これは、NEC環境経営の基本方針である「IT、で、エコ」と、「お酒を楽しむ(町を愛し)、福(笑)を呼び込む」との意を重ねて、本活動の本質を表そうと意図したものです。自然に直接触れることによってそのすばらしさを、そして収穫の喜びを分かち合うことによって「モノ作り」の原点を実感することが、持続可能な社会創りに向けたNECグループ環境経営の推進力強化につながるものと確信しています。

「エコ・エクセレンス」環境に関する知識も有し、日常的に環境に配慮した行動がとれる意識の高い人材

ご協力いただいた方々からのメッセージ

NPO法人アサザ基金 田んぼってこんなにたくさんトンボがいる場所なんだ!NEC田んぼ作りプロジェクトが2年目を迎えた昨年の夏、わたしはほんとうに驚きました。色とりどりのトンボがこんなにたくさん舞う光景を見たのは初めてでした。トンボ達の活気あふれる群舞が終わり、夕方近くなると田んぼはビクラシの声に包まれます。そして、その声が静まるころ、谷の奥深くの暗がりから幽(かす)かな光が舞い始めます。ヘイケホテルです。広大な霞ヶ浦流域の一角に、こんな豊かな里山の一日がよみがえりました。荒れてしまった里山に自然の豊かさを呼び戻そうと、わたしたちNPOとNEC、地元住民、地場産業等が新しい結び付きを創り上げました。その新たな結び付きが、多様な生き物たちの姿となって、わたしたちの目の前に現れはじめたのです。NEC田んぼ作りプロジェクトは、荒れてしまった里山に対して解決策を見出せなかった全国の人々にとって、ひとつの大きな光明となるでしょう。

白菊酒造(株) 霞ヶ浦周辺で育った者1人として、そして本業の酒造りを通して、谷津田の再生や霞ヶ浦浄化のお手伝いができるのであれば、と思い参加しました。このプロジェクトに参加して環境に対する意識が変わり始め、谷津田の復元により里山がもつごく自然を感じる場所になりました。これまで何気なく見てきた景色や自然が貴重な財産であるとあらためて認識しました。沢山の生き物たちのにぎわいが聞こえる。そんな谷津田から生まれたお米は「安心・安全」であることに参加者の方々も実感しているのではないのでしょうか。そしてお酒造りを通じて環境に対する興味への入り口になって頂ければと思っています。今後も、地域と密着したこの取組が自然保全を通じて循環型社会を生み出すことができるモデル事業になるよう協力していきたいと思っています。

(株)小倉味噌店 谷津田再生事業について、アサザ基金様よりお話しを頂き、昔ながらの手法で醸造しているお味噌を県外の方々に食べて頂き、お味噌に興味を持って頂ければとの思いで、イベントでの即売会、そしてお味噌作りのお手伝いに参加させて頂いております。自然の中での手作業の田んぼ作り、又地元での行事などを楽しんでいる様子を見て、あらためて人と人のつながり、人の手をかけた「もの作り」の大切さを痛感し、より一層愛情を込めて味噌作りに邁進していきたいと思いました。

広報関係

- <TV放映:2件> 2005.05.21 NHK水戸 茨城限定デジタル放送のニュース内で紹介
2005.07.06 青森朝日放送「北野大のえーコロジー」
- <雑誌掲載:3件> 日経エコロジー 6月号
日経ビジネス 2005.08.22号
環境時代2006新年号
- <新聞掲載:7件> 日本経済新聞、The NIKKEI WEEKLY、茨城新聞、
全国農業新聞、産経新聞
- <社内掲載:5件> DASHBOARD(社内ウェブ)、社長週間メッセージ(社内ウェブ)
NECライフ(社内誌)、NWU-COM(組合誌)

外部表彰:2件

- 2005.6.18 「第3回パートナーシップ大賞」にて「パートナーシップ賞」を受賞
- 2006.3.30 「第4回日本環境経営大賞」にて「環境連携賞」を受賞

NECとNPO法人アサザ基金との協働について

始まりは2003年4月のことでした。環境経営推進には全社員の環境意識向上が必須とする環境中期方針を打ち出していた折、ある外部人脈を通じてNPO法人アサザ基金殿をご紹介いただきました。ホームページなどでしっかりとアサザ基金殿の活動状況を知り、さっそう情報交換の場をもち、6月には活動現場を視察し、活動レベルの高さを実感しました。

アサザ基金殿とNECが共同で新しい活動を展開するに際し、最も強く意識したのは「オープンパートナーとしての協働」ということでした。NECがアサザ基金の活動に単に寄附をするとか、逆にNECの意識啓発活動をアサザ基金に委託するといった一方的な活動形態ではなく、独自のスキルやノウハウをお互いに活かして新しい活動を創り出してきたいということです。このような基本方針を明確にするために、2003年9月、活動全般に関する両者間の合意書を締結しました。

協働の最初の成果として、NECが独自に開発中であった「ネットワークセンサー」を用いた環境モニタリングシステムのプロトタイプ構築とその試行が実施できました。併せて、その秋から年末にかけて開催された各種展示会にその成果を出展し、社外から多くのお問い合わせをいただき、高い関心を寄せていただくことができました。

主課題である「全社員の環境意識啓発」については、アサザ基金殿が独自に計画されていた「谷津田の再生による水質浄化」事業を支援しながら「自然体験参加型の意識啓発プログラム」を実行することになりました。11月に初めて現地に足を踏み入れ、確認をしました。「こんなところがほんとうに田んぼにもどるのか?」という印象でした。しかし、翌1月に年間計画、3月に第1回の「田植え体験行事」を企画し、5月からの実施に移ると、その後の展開はあっという間でした。2004年10月の稲刈りには、当初、想像もできなかった黄金の田んぼが目の前に現れていました。明確な目標と良い出逢いの巡り合わせの賜です。

NECグループに同様の活動が展開され浸透していく一つの事例として、本活動を今後とも活性化していく予定です。

参加者へのアンケート



- 参加したきっかけは何ですか?**
- 昨年又は前回参加して有意義だったから 55名
 - 環境や自然に興味があったから 52名
 - 募集案内を見て楽しそうだから 41名
 - 家族とのコミュニケーションとして 34名
 - 友人に誘われて 20名
 - 社会貢献として 15名
 - 子供に体験させたかったから 5名
 - 田植えをしてみたかった 2名
 - 子供を特急レッシュリたちに乗せようと思った 1名
- 気持ちや行動に変化がありましたか?**
- ・自然に対する興味が増し、環境保全意識が高まった。
 - ・いつものまにか環境を意識するようになった。
 - ・季節ごとの食材を探し、四季を感じるようになった。
 - ・あらためて農業の大変さや、自然の役割の重要性、神聖性などを認識した。
 - ・生き物としての人間の暮らしの原点を感じた。
- コミュニケーションに変化がありましたか?**
- ・子供たちと共通の話題が出来た。
 - ・仕事と関係なく社内知り合いが増えてうれし。
 - ・食事を残さないこと、農業に携わっている人への感謝、虫たちの役割認識など、共通の原体験に基づいた納得性のある説明ができるようになった。

子供たちから、たくさんの絵を送っていただきました。

NEC
日本電気株式会社
〒108-8001 東京都港区芝五丁目7番1号
発行:2006年4月
お問い合わせ先: CSR推進本部 環境推進部
E-mail: info@eco.jp.nec.com
TEL: (03) 3798-6617(ダイヤルイン)
FAX: (03) 3798-9186
ホームページ http://www.nec.co.jp/eco/ja/

NEC田んぼ作りプロジェクトメンバー
宇塚、山辺、向達、上間、住田、佐野、白石、松下、大森、草間

事務局より
田んぼ作りPJの活動も2年目を終えました。回を重ねる毎に新規の参加者の方も増え、この活動の環が広がっていることを実感しています。2年間で参加頂いた社員・ご家族は、延べ1,600名を超えました。3年目となる2006年度も、楽しく参加出来る「自然体験型」イベントをさらに充実させ、NECグループの環境意識向上に努めてまいります。本活動を温かく見守っていただきありがとうございます。

本誌中の文章、写真、イラスト、ロゴ等の無断使用、転載を禁じます。

2005年度の取引量は、「清酒では初の記録」です。
アルコール度: 17.5
日本酒度: 1.9
酸度: 1.9



1日きこり

■**田んぼ周辺の整備**
◇5月15日(日) 晴れ
◇参加者: 約20名

谷津田に心地よい5月の風が吹き渡る中、田植えを翌週に控えた田んぼを背に、ボランティアとスタッフが参加して一日きこりが行われました。

午前の作業は田んぼ周辺の林の整備。林の中は東根笹がびっしりと茂り暗く見通しも良くありません。そんな林が明るく風通しのよい林と生まれ変わり、多くの生き物も喜んでいることでしょう。

午後は、畑へ通じる斜面に間伐した木を利用した階段作り。今年は、多くの参加者がこの階段を上って畑へ足を運んでくれることでしょう。

<参加者の声>

不耕起栽培を体験しました。掘って植えるという作業は昨年の田植え体験とは全く異なり、1つ1つの作業や稲が大切に思えました。/もともと人は自然と共存して生きていたという当たり前のことを身を以って少しだけ感じることができました。/一過性のブームで終わるのではなく、レジャー/教育/市民活動の一つとして広く定着することを期待して止まない。/大人も子供も一つの目標に向かって、楽しみながら作業を進めていく姿に、日頃都会で忘れていた大切な自然とヒトとの触れ合いの素晴らしさを実感しました。

ラベル貼りや小冊子の製本、720ml瓶の包装には、NEC田んぼに近い「社会福祉法人 聖隷会 知的障害者産産施設 あけぼの荘」の皆さんにご協力を頂きました。

■**新酒蔵出し**
◇3月4日(土) 晴れ (日照時間3.7時間、平均気温3.3℃、降水量0.4mm)
◇参加者: 約130名

前日の夕方にわか雨で開催が危ぶまれましたが、打って代わって早朝より晴天に恵まれ、多数の参加者を集まって頂きました。午前のイベントは、酒蔵コース(ラベル貼り・酒蔵見学・試飲即売会)と谷津田コース(リッツオウ作りと竹細工・落ち葉かき・里山整備)と盛り沢山でした。新酒「愛訂で笑呼」の瓶には、参加者自らの手でケナフ紙のラベルを貼ったり、小冊子とカバーの組み込み・ひも通しを行い、手作りして愛着の湧くものとなりました。

午後からは、全員谷津田で昼食後、谷津田周辺の生物調査、リッツオウ作りと竹細工の続き、キノコの原木作り、都市センターでラベル貼りを行いました。又、都市センターでは、田んぼ作りの一年間を振り返り、「田んぼ資料展示会」を開催し、荒れ果てていた谷津田を再生してきた過程や、これまでのイベントの写真を展示しました。更に、イベント3回以上参加した大人には、新酒「愛訂で笑呼」をお土産に持ち帰って頂き、本年度最後のイベントに相応しく、大いに盛り上がりました。

■**生物調査**
◇3月4日(土)
◇参加者: 約40名



田んぼで5班に分かれた参加者は、アサザ基金のリーダーの指導の下、「足の数や羽の有無」などで種類を見分けるシートを使って初めての水中生物調査に挑戦しました。

一見、生物など居そうにない田んぼ脇の水路の底を、網ですくいあげると、ザリガニ、ゲンゴロウ、ヨシノボリ、ドジョウ、カワニナ、ヤゴ、ミズムシなどたくさんの生物が棲んでいました。

<参加者の声>

初めて目にする生物の名前も知る事ができ、子供に生き物とのふれあいを体験させることができ本当によかった。/荒れていた田んぼが『NEC田んぼ作りプロジェクト』の活動によって、たくさんの生物が生きづくまでになった事に大変感動した。

生き物発見! お味噌を作る

ネットワークセンサー

田んぼ作りも2年目に入り、2005年度は多機能気象観測システムを田んぼに設置し、様々なデータを収集しています。設置している装置は、NEC-NEETグループの(株)エスイーシーが製品化したコンパクトな一体型気象観測システム『ウェザーバケット』です。この装置では、気温、相対湿度、露点温度、降水量、気圧、日射量(積算値)、風速(平均と最大瞬間)、風向(平均と最大時)、地中温度(水中温度)が10分単位で測定できます。以上のセンサーを搭載し、一体型にして、数十万円の価格帯で製品化を実現しています。さらに測定したデータは、特定小電力無線を利用して、パソコンで自動収集ができます。また、装置

泥んこ田植え

■**田植え**
◇5月21日(土) 晴れ (日照時間5.6時間、平均気温17.6℃、降水量1mm)
◇参加者: 約230名
◇約30000株の「日本晴」の苗を田植え

2年目を迎えたNEC田んぼは、新たに谷津田を再生し、約4反4畝(約4,400m²)の広さとなりました。新しい参加者も大勢加わり、大人も子供も足を取られながら楽しい田植えでした。

昨年5枚だった田んぼも、A~Jまで10枚の田んぼに増えました。昨年に引き続き参加して下さる方々もいらっしやるので予定していた時間よりも早く田植えを終えました。新しい試みとして、A・Bの田んぼでは、『不耕起栽培()』を行いました。土に穴を開けて苗を植え込みます。さらに、B田んぼには『ネットワークセンサー(ウェザーバケット)』を設置し、気温、水温、風速などを計測し谷津田の環境観察も行うことになりました。

昼食時には毎回人気の白菊酒造さんによるお酒の試飲販売に加え、今回からは同じく地元のお味噌店(小倉味噌さん)にも販売をして頂きました。

午後は畑での苗植え(サツマイモ、落花生、大豆など)と谷津田の散策も行いました。この畑で収穫する大豆を使い、冬には小倉味噌店さんのご協力でお味噌を作るイベントも実施しました。

そして、昨年同様に、今年も田植えに参加された方々より田植えをした田んぼの名前を募集し、Web投票によりそれぞれの田んぼの名前を決定しました。

A:ぶっこきA一号 B:コビキ田っス C:種C〜 D:風の谷の田んぼ
E:いい田んぼ F:ぼ田 G:グレート田んぼ H:でんでん太郎 I:愛ランド

不耕起(ふこうき)栽培とは、昨年収穫した稲の根本をそのまま残し、水田を耕さないまま次の稲を栽培する農法。耕起しないために、「省力化が可能」・「雑草の繁殖が抑えられる」・「土の移動による病気の蔓延が抑えられる」・「イネが本来の野生植物の力を発揮してくれる」などのメリットがある。

不耕起(ふこうき)栽培とは、昨年収穫した稲の根本をそのまま残し、水田を耕さないまま次の稲を栽培する農法。耕起しないために、「省力化が可能」・「雑草の繁殖が抑えられる」・「土の移動による病気の蔓延が抑えられる」・「イネが本来の野生植物の力を発揮してくれる」などのメリットがある。

■**味噌作り**
◇1月14日(土)
◇参加者 約55名

1月の肌寒い中、苗から育てた大豆と有機栽培の大豆を使って味噌作り体験を行いました。外の大鍋から、茹で上がった大豆をバケツリレーならぬボールリレーで親御さんたちと子どもたちが運びました。地元の小倉味噌店の指導を受けながら、手で潰した大豆に塩とNEC米で作った麹を混ぜ合わせ作り上げたのは味噌の原型約100kg。

保存方法を聞き、参加者もそれぞれ持ち帰りました。7月の土用の頃まで寝かせて発酵させると味噌らしくなるそうです。秋のイベントでの炊き出しでも頂くことが出来ます。

<参加者の声>

最初の漬す作業は力があるけれど来年は自分の家でも作ってみたい。/これが発酵して味噌になるとは想像できない。

泥んこ田植え

■**草取り・虫鑑賞会**
◇一の草: 6月25日(土) 晴れ (約20名参加)
◇二の草・虫鑑賞会: 7月30日(土) 曇り (約180名参加) (日照時間2.4時間、平均気温26.2℃、降水量0mm)
◇三の草: 8月6日(土) 晴れ (約10名参加)
◇四の草: 8月21日(土) 晴れ (約15名参加)



■**酒仕込み神事**
◇1月14日(土) 曇り時々小雨
◇参加者 約60名

白菊酒造にて石岡市東大橋の香取神社の宮司さんにより酒仕込み神事が行われました。読み上げられる「祝詞(のりと)」には「荒れた田んぼを耕して、水を育み生きた物たちがよみがえる…」このような田んぼ作りプロジェクトの物語が織り込まれており、プロジェクト関係者が玉串を捧げて仕込みの安全と醸造の成功を祈願しました。

その後、「洗米」、「麹造り」、「仕込み」、「酒しぼり」などの酒造り工程の見学と新酒の試飲会、甘酒もいただきました。

昼食の炊き出しは、田んぼや都市センターの周りで採ったセリ、ナズナ、ハコベラ等、春の七草が入った1/7の七草粥と1/15の小豆粥という正月の伝統的食事を再現しました。午後からは冬の谷津田散策や竹細工、小さく丸めた紅白の餅を櫛の木の枝に付ける「ならせ餅」など、この地域の正月行事も体験しました。

同士でもデータ中継できるので、複数台を農地に設置して、面で気象データを把握することができます。無線が届かない場所では、約3ヶ月分の測定データが蓄積保持されます。電源はソーラーパネルバッテリーを実装しており、全く日照がない状態でも約3週間移動することができます。NEC田んぼでは、この気象データを蓄積・分析して、稲の生育状況と天候の関係を正確に把握。田植えや草取り、稲刈りなどの作業時期の決定や日常の水管理に役立てていこうとしています。また、戻ってきた貴重な生き物たちの生息環境を知るためのデータとして、荒地を水田に戻したことによるクールアイランド効果の測定など、様々な分野で活用していくことに自ら取り組んでいます。

汗だく草取り

■**草取り・虫鑑賞会**
◇一の草: 6月25日(土) 晴れ (約20名参加)
◇二の草・虫鑑賞会: 7月30日(土) 曇り (約180名参加) (日照時間2.4時間、平均気温26.2℃、降水量0mm)
◇三の草: 8月6日(土) 晴れ (約10名参加)
◇四の草: 8月21日(土) 晴れ (約15名参加)

6月になると田んぼも稲の緑で覆われ始めました、同時に田の草も姿を現します。最初の草取り(一の草)では、草の勢いに負けないようみんながんばりました。二の草は、蒸し暑い17月終わりに行いました。水面を覆い隠すコナギ、アメリカセンダングサ、イヌビエなど、稲より立派な雑草と泥んこになって格闘しました。昔使われた手押し除草機も動きましたが、それでも真夏の草取りは大変。みなさん、本当にご苦勞様でした。草取りの後は冷えたスイカやトマトでほった身体を冷やし、オカリナコンサートや粟山子作りを楽しみました。ザリガニ釣りには大人も夢中になり、カブトムシにつられて木にも登りました。残った草は精鋭部隊ががんばってやつつけました。

夕方にはアサザ基金の飯島代表によるスライドショー「NEC田んぼの一年」。子供たちがどんどん前に詰めかけ、知っている昆虫が出てくると大はしゃぎ。夕食後は、お待ちかねの夜の谷津田散策。羽化のため木に登っていくアブラゼミに驚き、オカリナの演奏を聞きながらヘイケボタルの淡い光を楽しみました。

8月、穂が出る前に最後の草取りを行いました。ひたすら草取り、草取り。炎天下の作業は続けて30分が精一杯。何度も木陰と行き来します。でも、「自分たちが育てている田んぼ」を最も実感できた充実の日でした。



■**稲刈り**
◇10月22日(土) 雨 (日照時間0時間、平均気温15.6℃、降水量2mm)
◇参加者: 約210名
◇立てたオダ樵: 60本(オダ足:300本)

田植えから5ヶ月が経ちました。NECの田んぼではアキアカネが、重そうに頭をたれた稲穂の間をスイスイと飛び交っています。その谷津田に待ちに待った収穫の時がやって来ました。ところが天気は生憎の雨です。悪天候で参加人数が心配でしたが、200人の参加者とスタッフが集まり、稲刈りは一斉にスタートしました。

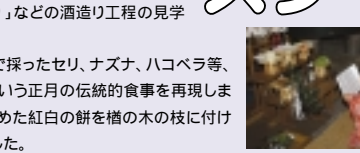
開始した10時ごろ、雨は本降りになってきましたが、みんな雨合羽をつけて、一生懸命です。ぬかるんで歩くのもままならない田んぼもありましたが、稲を刈りだすと止まりません。それぞれの田んぼに分かれ、稲を刈る人、稲束束ねる人、オダに干す人、肌寒い雨の中、効率的に作業が進みました。雨で水を含み稲が重くなっているため、稲束をかけたオダが倒れる田んぼが続出しましたが、開始して2時間、予定どおり稲刈りは終了しました。雨が降るのは自然の摂理。子どもたちはかっぱを着て、泥だらけになっていましたが、こんな経験はこころがけないと、大喜びではしゃいでいました。

■**脱穀**
◇11月3日(木) 祭日:文化の日 ◇参加者: 約90名
◇脱穀成果: 約21.5俵(初ベースで約1,300kg)

昨年と同じ晴れた「文化の日」に、天日干した稲からいよいよ初を取り出す「脱穀」です。昔ながらのガーコン(足踏み式脱穀機)を使った脱穀には、大人も子供も列をなして順番待ち!

ペダルを踏み込むと、小さな針金の輪がついたドラムが「ガーコン、ガーコン、ガーッコン!」と音をたてて勢いよく回ります。稲がドラムにからんで初が勢いよく吹き飛ばされる様と、ペダルを足で踏みドラムを回すコツが少し難しいところがテレビゲームよりも面白く、はまってしまい止められない感じです。みんな、とても楽しそうでした!対するは、文明の利器:ハーベスタ(自走式動力脱穀機)。約4反4畝(約4,400m²)から収穫できた稲を、オダに沿って移動しながらどんどん脱穀していきます。

約3時間で脱穀し終えました。無農薬、無肥料、太陽の光と水と空気、そして人の手塩が加わって、2005年度のお米の収穫量は約1,300kg(約21.5俵、初ベース)でした。



汗だく草取り

■**草取り・虫鑑賞会**
◇一の草: 6月25日(土) 晴れ (約20名参加)
◇二の草・虫鑑賞会: 7月30日(土) 曇り (約180名参加) (日照時間2.4時間、平均気温26.2℃、降水量0mm)
◇三の草: 8月6日(土) 晴れ (約10名参加)
◇四の草: 8月21日(土) 晴れ (約15名参加)

6月になると田んぼも稲の緑で覆われ始めました、同時に田の草も姿を現します。最初の草取り(一の草)では、草の勢いに負けないようみんながんばりました。二の草は、蒸し暑い17月終わりに行いました。水面を覆い隠すコナギ、アメリカセンダングサ、イヌビエなど、稲より立派な雑草と泥んこになって格闘しました。昔使われた手押し除草機も動きましたが、それでも真夏の草取りは大変。みなさん、本当にご苦勞様でした。草取りの後は冷えたスイカやトマトでほった身体を冷やし、オカリナコンサートや粟山子作りを楽しみました。ザリガニ釣りには大人も夢中になり、カブトムシにつられて木にも登りました。残った草は精鋭部隊ががんばってやつつけました。

夕方にはアサザ基金の飯島代表によるスライドショー「NEC田んぼの一年」。子供たちがどんどん前に詰めかけ、知っている昆虫が出てくると大はしゃぎ。夕食後は、お待ちかねの夜の谷津田散策。羽化のため木に登っていくアブラゼミに驚き、オカリナの演奏を聞きながらヘイケボタルの淡い光を楽しみました。

8月、穂が出る前に最後の草取りを行いました。ひたすら草取り、草取り。炎天下の作業は続けて30分が精一杯。何度も木陰と行き来します。でも、「自分たちが育てている田んぼ」を最も実感できた充実の日でした。



■**稲刈り**
◇10月22日(土) 雨 (日照時間0時間、平均気温15.6℃、降水量2mm)
◇参加者: 約210名
◇立てたオダ樵: 60本(オダ足:300本)

田植えから5ヶ月が経ちました。NECの田んぼではアキアカネが、重そうに頭をたれた稲穂の間をスイスイと飛び交っています。その谷津田に待ちに待った収穫の時がやって来ました。ところが天気は生憎の雨です。悪天候で参加人数が心配でしたが、200人の参加者とスタッフが集まり、稲刈りは一斉にスタートしました。

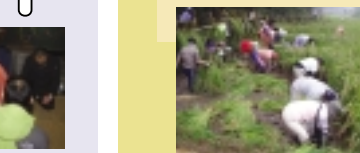
開始した10時ごろ、雨は本降りになってきましたが、みんな雨合羽をつけて、一生懸命です。ぬかるんで歩くのもままならない田んぼもありましたが、稲を刈りだすと止まりません。それぞれの田んぼに分かれ、稲を刈る人、稲束束ねる人、オダに干す人、肌寒い雨の中、効率的に作業が進みました。雨で水を含み稲が重くなっているため、稲束をかけたオダが倒れる田んぼが続出しましたが、開始して2時間、予定どおり稲刈りは終了しました。雨が降るのは自然の摂理。子どもたちはかっぱを着て、泥だらけになっていましたが、こんな経験はこころがけないと、大喜びではしゃいでいました。

■**脱穀**
◇11月3日(木) 祭日:文化の日 ◇参加者: 約90名
◇脱穀成果: 約21.5俵(初ベースで約1,300kg)

昨年と同じ晴れた「文化の日」に、天日干した稲からいよいよ初を取り出す「脱穀」です。昔ながらのガーコン(足踏み式脱穀機)を使った脱穀には、大人も子供も列をなして順番待ち!

ペダルを踏み込むと、小さな針金の輪がついたドラムが「ガーコン、ガーコン、ガーッコン!」と音をたてて勢いよく回ります。稲がドラムにからんで初が勢いよく吹き飛ばされる様と、ペダルを足で踏みドラムを回すコツが少し難しいところがテレビゲームよりも面白く、はまってしまい止められない感じです。みんな、とても楽しそうでした!対するは、文明の利器:ハーベスタ(自走式動力脱穀機)。約4反4畝(約4,400m²)から収穫できた稲を、オダに沿って移動しながらどんどん脱穀していきます。

約3時間で脱穀し終えました。無農薬、無肥料、太陽の光と水と空気、そして人の手塩が加わって、2005年度のお米の収穫量は約1,300kg(約21.5俵、初ベース)でした。



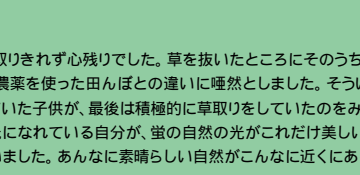
汗だく草取り

■**草取り・虫鑑賞会**
◇一の草: 6月25日(土) 晴れ (約20名参加)
◇二の草・虫鑑賞会: 7月30日(土) 曇り (約180名参加) (日照時間2.4時間、平均気温26.2℃、降水量0mm)
◇三の草: 8月6日(土) 晴れ (約10名参加)
◇四の草: 8月21日(土) 晴れ (約15名参加)

6月になると田んぼも稲の緑で覆われ始めました、同時に田の草も姿を現します。最初の草取り(一の草)では、草の勢いに負けないようみんながんばりました。二の草は、蒸し暑い17月終わりに行いました。水面を覆い隠すコナギ、アメリカセンダングサ、イヌビエなど、稲より立派な雑草と泥んこになって格闘しました。昔使われた手押し除草機も動きましたが、それでも真夏の草取りは大変。みなさん、本当にご苦勞様でした。草取りの後は冷えたスイカやトマトでほった身体を冷やし、オカリナコンサートや粟山子作りを楽しみました。ザリガニ釣りには大人も夢中になり、カブトムシにつられて木にも登りました。残った草は精鋭部隊ががんばってやつつけました。

夕方にはアサザ基金の飯島代表によるスライドショー「NEC田んぼの一年」。子供たちがどんどん前に詰めかけ、知っている昆虫が出てくると大はしゃぎ。夕食後は、お待ちかねの夜の谷津田散策。羽化のため木に登っていくアブラゼミに驚き、オカリナの演奏を聞きながらヘイケボタルの淡い光を楽しみました。

8月、穂が出る前に最後の草取りを行いました。ひたすら草取り、草取り。炎天下の作業は続けて30分が精一杯。何度も木陰と行き来します。でも、「自分たちが育てている田んぼ」を最も実感できた充実の日でした。



■**稲刈り**
◇10月22日(土) 雨 (日照時間0時間、平均気温15.6℃、降水量2mm)
◇参加者: 約210名
◇立てたオダ樵: 60本(オダ足:300本)

田植えから5ヶ月が経ちました。NECの田んぼではアキアカネが、重そうに頭をたれた稲穂の間をスイスイと飛び交っています。その谷津田に待ちに待った収穫の時がやって来ました。ところが天気は生憎の雨です。悪天候で参加人数が心配でしたが、200人の参加者とスタッフが集まり、稲刈りは一斉にスタートしました。

開始した10時ごろ、雨は本降りになってきましたが、みんな雨合羽をつけて、一生懸命です。ぬかるんで歩くのもままならない田んぼもありましたが、稲を刈りだすと止まりません。それぞれの田んぼに分かれ、稲を刈る人、稲束束ねる人、オダに干す人、肌寒い雨の中、効率的に作業が進みました。雨で水を含み稲が重くなっているため、稲束をかけたオダが倒れる田んぼが続出しましたが、開始して2時間、予定どおり稲刈りは終了しました。雨が降るのは自然の摂理。子どもたちはかっぱを着て、泥だらけになっていましたが、こんな経験はこころがけないと、大喜びではしゃいでいました。

■**脱穀**
◇11月3日(木) 祭日:文化の日 ◇参加者: 約90名
◇脱穀成果: 約21.5俵(初ベースで約1,300kg)

昨年と同じ晴れた「文化の日」に、天日干した稲からいよいよ初を取り出す「脱穀」です。昔ながらのガーコン(足踏み式脱穀機)を使った脱穀には、大人も子供も列をなして順番待ち!

ペダルを踏み込むと、小さな針金の輪がついたドラムが「ガーコン、ガーコン、ガーッコン!」と音をたてて勢いよく回ります。稲がドラムにからんで初が勢いよく吹き飛ばされる様と、ペダルを足で踏みドラムを回すコツが少し難しいところがテレビゲームよりも面白く、はまってしまい止められない感じです。みんな、とても楽しそうでした!対するは、文明の利器:ハーベスタ(自走式動力脱穀機)。約4反4畝(約4,400m²)から収穫できた稲を、オダに沿って移動しながらどんどん脱穀していきます。

約3時間で脱穀し終えました。無農薬、無肥料、太陽の光と水と空気、そして人の手塩が加わって、2005年度のお米の収穫量は約1,300kg(約21.5俵、初ベース)でした。



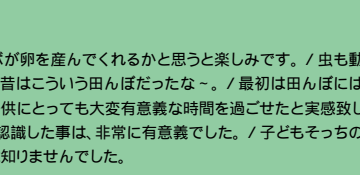
畑

■**野菜作り**
◇5月21日(土) 苗植え (約30名)
◇8月21日(土) 草取り (約15名)
◇10月22日(土) 収穫 (約30名)

田んぼの隣にある広さ0.2ヘクタールの畑で、季節に合わせて、大豆、サツマイモ、落花生をメインに、さらにはひょうたん、かんぴょう、ゴマ、荳胡麻、小豆、あわ、きび、そばなどの野菜作りを行いました。

稲刈りの時には、子供たちを主役にしたサツマイモの芋堀を行いました。慣れない鎌による作業のため、始めは芋に鎌が刺さるなど苦勞していましたが、だんだんと上手になっていきました。いつのまにか大人まで夢中になり、大きな芋から小ぶりで何個も連なった芋まで、全ての芋を掘りきりました。

田んぼで焚き火をしながら収穫した芋で焼き芋を作り、旬の旨さを満喫しました。残った芋は、参加した皆さんのおみやげになりました。



■**稲刈り**
◇10月22日(土) 雨 (日照時間0時間、平均気温15.6℃、降水量2mm)
◇参加者: 約210名
◇立てたオダ樵: 60本(オダ足:300本)

田植えから5ヶ月が経ちました。NECの田んぼではアキアカネが、重そうに頭をたれた稲穂の間をスイスイと飛び交っています。その谷津田に待ちに待った収穫の時がやって来ました。ところが天気は生憎の雨です。悪天候で参加人数が心配でしたが、200人の参加者とスタッフが集まり、稲刈りは一斉にスタートしました。

開始した10時ごろ、雨は本降りになってきましたが、みんな雨合羽をつけて、一生懸命です。ぬかるんで歩くのもままならない田んぼもありましたが、稲を刈りだすと止まりません。それぞれの田んぼに分かれ、稲を刈る人、稲束束ねる人、オダに干す人、肌寒い雨の中、効率的に作業が進みました。雨で水を含み稲が重くなっているため、稲束をかけたオダが倒れる田んぼが続出しましたが、開始して2時間、予定どおり稲刈りは終了しました。雨が降るのは自然の摂理。子どもたちはかっぱを着て、泥だらけになっていましたが、こんな経験はこころがけないと、大喜びではしゃいでいました。

■**脱穀**
◇11月3日(木) 祭日:文化の日 ◇参加者: 約90名
◇脱穀成果: 約21.5俵(初ベースで約1,300kg)

昨年と同じ晴れた「文化の日」に、天日干した稲からいよいよ初を取り出す「脱穀」です。昔ながらのガーコン(足踏み式脱穀機)を使った脱穀には、大人も子供も列をなして順番待ち!

ペダルを踏み込むと、小さな針金の輪がついたドラムが「ガーコン、ガーコン、ガーッコン!」と音をたてて勢いよく回ります。稲がドラムにからんで初が勢いよく吹き飛ばされる様と、ペダルを足で踏みドラムを回すコツが少し難しいところがテレビゲームよりも面白く、はまってしまい止められない感じです。みんな、とても楽しそうでした!対するは、文明の利器:ハーベスタ(自走式動力脱穀機)。約4反4畝(約4,400m²)から収穫できた稲を、オダに沿って移動しながらどんどん脱穀していきます。

約3時間で脱穀し終えました。無農薬、無肥料、太陽の光と水と空気、そして人の手塩が加わって、2005年度のお米の収穫量は約1,300kg(約21.5俵、初ベース)でした。

